



地域の人々との協働による実践型地域研究の試み 東南アジア研究所長・研究プロジェクト代表 水野広祐

東南アジア研究所は、京都大学の4つの研究所(化学研究所・エネルギー理工学研究所・生存圏研究所・防災研究所)とともに生存基盤科学研究ユニットをつくり、既成科学の学問的な枠にとらわれない自由な発想に基づく、人類の生存のための科学を築く研究活動に参加しています。東南アジア研究所は、従来、東南アジアを中心とする海外地域を主なフィールドとして地域研究を行ってきました。生存基盤科学研究ユニットでは、人々とともにある地域研究の理念をきっかけ、サイト機動型研究の一つの柱として、これまでの海外での研究で蓄積された知見を日本の地域社会に活かそうという目標を立てました。滋賀県立大学、京都学園大学、NPO プロジェクト保津川、美しい湖国(NPO もやいネット)、NPO 市民環境研究所、火野山ネット、守山市、亀岡市、高島市などの諸団体と地元の皆さんと一緒に地域の問題を考

え行動する「在り地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」プロジェクトを立ち上げました。具体的な実践型地域研究の場として滋賀県の朽木、守山、京都府の亀岡が選ばれ、フィールドステーション(FS)が設置され、対象を外から観察するだけではなく、内側から問題を把握し解決の方策を地域の皆さんと一緒に考えます。朽木FSでは、「水と火のエネルギーを活用した、源流域での生業基盤づくり」、亀岡FSでは「筏をシンボルとした人・山・川・町(都市)のつながりの再構築」、守山FSでは「琵琶湖の漁業と食文化の復興」など、FS担当の研究員を中心に、地元住民・NPO・地方自治体との協働による実践的な研究活動に取り組んでいます。本プロジェクトが円滑に目的を達成するためには、是非とも地元の皆様、関係団体の皆様、ユニット関係者の皆様のご協力とご理解、そしてご参加が必要です。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

11月の催し

■姫田忠義さん(民族文化映像研究所)を招いた上映会と交流座談会

1. 日時:11月15日(土)14:30~
2. 場所:ECC 学園高等学校(旧・今津西小学校椋川分校)
3. 内容:上映会・交流座談会
①上映会「奥茂庭～摺上川の流れとともに～」(14:30~)
福島市北部を流れる摺上川。この流域の男振・梨平・名号の三集落は市営ダム建設により沈みました。摺上川の流れとともに年月を刻み、蚕を飼ひ、炭を焼き、シナダを織って、山に営々と生きてきた茂庭の人たちの、四季に対応した生活をおった記録です。
②交流座談会「山里で子どもはどう育ってきたか」(15:30~)
4. 入場料:500円(定員60名・要申込み)
主催・連絡先:「結いの里・椋川」事務局(担当:是永)Tel:0740-24-8101

■「おっきん! 椋川」

1. 日時:11月23日(日) 9:30~16:00頃
2. 場所:椋川集落内 (JR 湖西線「安曇川」「新旭」駅、京都バス・江若バス「朽木学校前」より送迎バスあり)
3. 内容:「椋川の風景画」展など
「おっきん」とはこの地方の言葉で「ありがとう」という意味。「おっきん! 椋川」は椋川集落を一日開放して、街の人と交流し、椋川の暮らしや人た

と直に交流できる山里のてづくり収穫祭です。椋川までのアクセス、当日の主な催し、送迎バスの時刻については、下記のホームページをご覧ください。(むくがわの里HP <http://mukugawa.korekore.org>)

主催・連絡先:「結いの里・椋川」事務局(担当:是永)Tel:0740-24-8101
後援:高島市・高島地域観光振興協議会

■プロジェクト保津川 第11回定例清掃会

1. 日時:11月9日(日) 7:50集合 8:00~9:00頃
2. 集合場所:月読橋下河川敷(月読橋球場下の河原。無料駐車場あり。JR千代川駅から徒歩約10分。)
3. 内容:保津川の清掃活動
プロジェクト保津川では、第2日曜日に定例清掃会を実施しています。今回は、「月読橋」一帯(亀岡市千代川町・馬路町)で開催します。会員の皆様以外のご参加も大歓迎ですので、ふるってご参加ください。多くの方のご参加をお待ちしております。保険については、事務局にてボランティア保険に加入します。長袖、長ズボンの動きやすい服装でお越しください。長靴でお越しただくと清掃範囲が広がります。雨具、軍手(ゴム製が望ましい)、長靴、防寒着などは各自ご持参ください。ゴミ袋、火バサミなどの清掃に必要な道具は事務局にて用意いたします。
4. 参加費:無料
ご不明な点につきましては、事務局までお問合せください。
主催・連絡先:「プロジェクト保津川」事務局(担当:中野)
Tel: 0771-22-1616, Fax: 0771-25-2382 E-mail: info@hozugawa.org

守山フィールドステーション

フィールドステーション守山の近況報告

聖泉大学 高谷好一

守山はどのような歴史的展開をしてきたのか、将来はどのような地域にすることが望ましいのか。この2つのことを守山フィールドステーションでは調べようとしています。守山市は、3つの地区からなっています。中山道沿いの市街地、琵琶湖周辺、それにこの2つには含まれた農村地区です。このステーションでは、この3つの地区について次のような研究活動をしようとしています。

まず市街地ですが、ここでは守山市が中心市街地活性化計画というのを進めています。私たちはこれと連携して研究を進めようとしています。月1回の合同研究会を予定していますが、すでに「守山のまちづくり」（9月24日）、「守山宿の文化」（10月8日）をやりました。こうした研究会の他に、もっとソフトなものとして、中山道の町家でオカリナの集

いなども行っております。広く市民をまきこんで、地域を考える、というのが狙いです。

琵琶湖では、ひん死の状態にある琵琶湖漁業をいかにして復活させるかが緊急の問題です。フナやモロコといった在来の魚を増やし、それらを利用した食文化を取り戻すということを考えています。これには漁師の戸田直弘さんを先生にして、FS 研究員の嶋田奈穂子が行っています。

中間の農村部では、さしずめ戦後の変容を詳しく調べるつもりです。ここは高谷好一の生まれた場所でもあり、同級生などが多いため、その人たちの協力を得て、研究を進めるつもりです。



琵琶湖のエリ漁の風景
網を外側から順に揚げていく

滋賀県の水辺の生活を考える -漁師のフナズシ-

守山 FS 研究員 嶋田奈穂子

フナズシは、滋賀県無形民俗文化財にも指定されている、高級珍味として名高い近江の伝統食です。滋賀県で食される淡水魚と飯の発酵食品をナレズシといいます。時間をかけて発酵させ、米粒が残らないものを「本ナレズシ」、短い発酵期間で飯が粒で残るものを「生ナレズシ」といいます。中でも、ニゴロブナの本ナレズシ（フナズシ）がその代表格とされ、味、食感ともに最高といわれます。しかし、滋賀県ではオイカワ、アユ、ハス、モロコなど様々な琵琶湖の魚がナレズシに用いられてきました。

「琵琶湖の魚は塩漬けさえしておけば何でもおいしく食べられる」とさえいわれるといいます。要するに、滋賀県が誇るべき文化はフナズシだけではなく、「湖魚のナレズシ」ともいえるのです。

「ワシとこの桶には10種類以上の湖魚が漬かっている。ゴモクズシや！」と誇らしげに話す漁師さんがいます。現在、滋賀県で市販されているフナズシ

のフナは、多くが県外産です。外国で塩漬けにされたフナを滋賀で飯漬けにする場合もあります。「これが、本当に近江の文化の発信なんやろか」漁師さんは言います。「フナでなくても、琵琶湖で育った琵琶湖の魚を漬けてあるものが、それが滋賀の文化と違うのか」

繁殖が進む外来魚を食べてみたり、獲れなくなったニゴロブナを外から持ってきたり、そんな応急手当ではなく、今琵琶湖にいる、ずっと滋賀の漁業と食文化を支えてきた在来魚に今一度目を向けてみる。琵琶湖を生活の場とする漁師さんの声をもっと聞いてみる。そんな中から滋賀県の水辺の生活について考えていこうと思っています。



琵琶湖のエビ大豆と炊き合わせた「エビマメ」は、滋賀県でよく食された

源流域における「くらしの森」の再生に向けて -水と火のエネルギーを活かした生業基盤づくり- 朽木FS 研究員 今北哲也

生業基盤づくりとは大それた課題です。

私たちは、今 70～80 歳代の村の先輩たちが予想もしなかった山の姿に出会っています。たとえば広葉樹林。50 年を越えようとするヒネた（過熟な）雑木山。広がる檜や松の枯れ木立。鹿に食べ尽くされ、異様に見通せる林床風景。そして、失われた山藪、山葵、ぜんまい、茸。飢饉の冬、むらの命を繋いできた山野の菜。無謀にも、それらの復活に取り組むことが「くらしの森」の再生を象徴すると考えるに至りました。「くらしの森」の再生とは山で暮らしを立てる生業基盤をつくっていくことです。地域社会への展開という、さらに大それた目論見はさておいて、まずは朽木フィールドステーションでのささやかな取り組みの意図と背景について述べます。

山野の恵み

1960 年代頃まで、山里では山や原野の恵みを糧とし暮らして来ました。木出し（天然スギ・栗など家・小屋材料の伐出）、タキモン（薪）伐り、ネソ・フジ（結束材）伐り、山菜や茸採り、溪流魚などの川漁、熊・猪・山鳥などの狩り、山野からの刈敷き採取……。山は衣食住、百姓百品を産み出す源（みなもと）でした。

山野へのはたらきかけ

採るだけでなく、伐採・火入れ・刈払い・採取を繰り返す営み。そして、火入れに代表される山へのプレッシャー。そのようなつきあい方の結果として、様々な「山野の恵み」がもたらされていました。40～50 年前まで湖西のあちこちでは、山野に火を放ち、檜や茅に特化された原野風景が広がっていました。このように山野への絶えざる人間の働きかけによって安定的に生み出される生業（なりわい）空間を、私たちは原野も含め「くらしの森」とよぶことにしました。

新たな生業（なりわい）がみえるモノづくり

しかし、かつての山の暮らし世界は近代化という荒波を被ることになります。そして限界集落です。私たちは源流域の風土に立ち、小さな規模ながらも、明日につながる「くらしの森」の再生に取り組みたいと考えました。そして、山野から食べ物を生み出す手だて＝脅威であり恵みでもあった火と水のエネルギー、に注目しました。山の先輩たちが培ってきた智恵や技（ローテク）に立ちながら、現代の技術（ハイテク）を仕込み、生業基盤づくりを目指したいと考えています。

次世代との協同作業

フィールドは湖西・湖北の琵琶湖源流域です。ここでは都会育ちの若者たちがもうひとつの暮らしの世界を求めて新规定住に挑戦しています。何人かは私たちの取り組みのサポーターになってくれると期待しています。フィールドでの実験や研究、地域に学ぶワークショップなどは地元のベテランと若者たちをつなぐ現場でもあります。

生物多様性の回復と生存基盤

直接的には鹿害による今日の惨憺たる林床の姿が、賑やかでワクワクする山野によみがえれば、山に楽しみが戻ってくることでしょう。しごとを創ってくれる多彩な生き物たちが顔を揃えてくれるのです。山が若くて元気であることは、いずれ若者たちのエネルギーとなり、ひいては在所（むら）にも新陳代謝が生まれてくるのではないのでしょうか。

これからの研究活動、フィールド体験、ワークショップなど様々な現場を通してご意見、提案をいただきたいと思っています。次回は研究内容とメンバーについてお伝えします。



原野履歴のナラ二次林と田圃—朽木・針畑川源流

「筏」をシンボルとした「人・山・川・町(都市)」のつながりの再構築 -研究の概略とこれまでの動き-

亀岡 F S 研究員 河原林洋

丹波地域を流れる保津川(桂川)は、かつて筏や舟により物資が京都・大坂へと運ばれ、流域住民の生活は河川と密接なかかわりを持っていた。明治期には英国の写真家、H・G・ポンティングにより景勝地として紹介されるなど美しい景観が保たれていた。しかし、現在は、ゴミの不法投棄、漂着ゴミの大量発生、水質悪化や水生生物の減少などさまざまな問題を抱えている。これらの問題は、筏流しに代表される山や川での流域住民の営みが薄れ、また、河川工事などにより人によって人の近づけない川へと変わりつつある中、流域住民の山や川のつながりの希薄化の表れではないだろうか。

この研究は、流域をつなぐ物資輸送の魁でもあった「筏」をシンボルとして流域の「人・山・川・町」のつながりの再構築を模索するものである。そのため筏士をはじめ、農林水産業を生業としてきた流域住民の伝統技術・文化・風俗などを調査し、かつての「人・山・川・町」のつながりの「記憶」を現在に活用できるつながりの「知恵」として再構成する。また、「筏」をテーマとしたイベントの実施等を通じて流域間交流を深め、森林従事者、河川従事者、各種市民団体、企業、学校など多種多様な組織の共同体を構築し、材木の地産地消、自然豊かな河川環境、世代間のつながりなどの再構築を模索する。



筏組の様子

今年度はこれまで、筏流しの計画を立案し、亀岡市文化資料館・黒川館長に計画を提案。両者とともに協力参加団体を打診し、2008年5月14日「保津川筏復活プロジェクト連絡協議会」(以下筏協議会)を発足。行政、企業、各種市民団体、教育機関など約19

団体の参加、協力をみる。

この筏協議会において亀岡市保津町在住の元筏士、酒井昭雄氏(80歳)と上田潔氏(89歳)を対象とする筏の歴史・文化・風俗の聞き取り調査を計4回実施。主に筏組みの技術、当時の筏流しの様子などを調査。平行して筏流しのイベントを計画。イベントの運営計画、材木の丸太の調達、材木をつなぐ部材の調達、又は筏を実際に組みあやつる予定の現役の船頭(保津川遊船企業組合)の人選などを実施。亀岡市文化資料館における筏組みの予行練習を経て、2008年9月10日(水)「保津川筏復活プロジェクト2008」を実施。筏組みの聞き取り、現役船頭による筏組み技術の習得(6連の筏を作成)、地元亀岡市の保津小学校・南丹高校の生徒対象の体験型歴史文化教室の開催(生徒数86名)、その後保津川遊船乗船場前河川敷から山本浜まで約3キロの筏流しを再現した。また、流域住民の見学会も行われ、平日にも関わらず約70名の流域住民の参加をみた。筏流しに使われた材木の一部は亀岡市篠町自治会の長尾山における里山事業に再利用される予定である。

今後は更なる元筏士の聞き取り調査による「人と川」とのつながり、材木の丸太の調達による「人と山と川」のつながり、調達した材木の再利用を通して「山と町」のつながりを模索していきたい。



保津川を60年ぶりに下る筏



歴史文化教室の様子